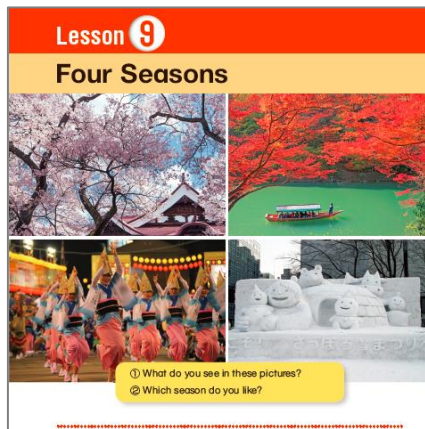
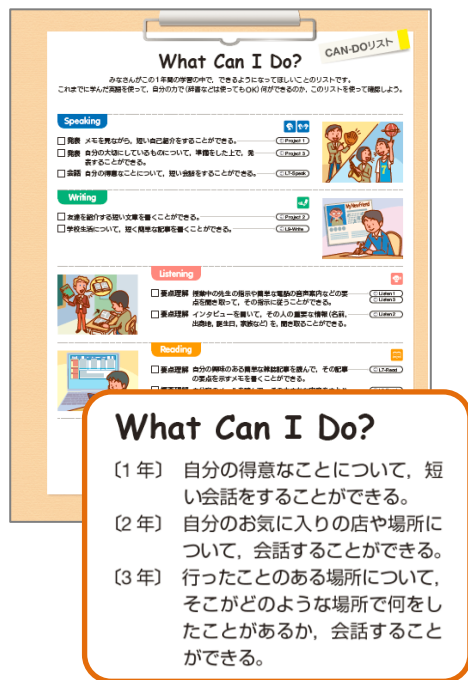


# 主体的に学ぶ



## この課で学ぶこと

- 日本の身近な年中行事について関心を高める。
- 一般動詞の過去形を理解し、使う。
- 日本の年中行事についての物語文を読む。
- 学校生活についての記事を書く。



## What Can I Do?

- 〔1年〕 自分の得意なことについて、短い会話をすることができる。
- 〔2年〕 自分のお気に入りの店や場所について、会話することができる。
- 〔3年〕 行ったことのある場所について、そこがどのような場所か、何をしていたことがあるか、会話することができる。

## 1. 主体的に学ぶこと



松沢 伸二  
(新潟大学)

現行の教育課程は、「主体的に学習に取り組む態度」(学校教育法)を養い、「自主的、自発的な学習」(中学校学習指導要領総則)を促す指導を求めている。そしてその指導では、「生徒の興味・関心」を生かした「基礎的・基本的な知識及び技能を活用した問題解決的な学習」や「体験的な学習」を重視せよとしている(同総則)。

こうした問題解決的・体験的な学習は、「アクティブ・ラーニング」とも言われる。この言葉は1990年代の米国の大学での理工系教育の改善に使われたものだが、「能動的学修」の訳語とともに、日本の大学教育に取り入れられるようになった。さらに「アクティブ・ラーニング」は、文部科学大臣の中教審への諮問(平成26年11月20日)で、「課題の発見と解決に向けて主体的・協動的に学ぶ学習」と言及されてから、初等中等教育にも広まっている。

## 2. 主体的に学ぶ態度の育成：活動

これまでの研究で、学習者の主体的に学ぶ態度は、「見通しを立てる→活動に取り組む→学習を振り返る」と進める指導で育成できることが明らかになっている。この指導モデルのポイントの1つは「活動」にある。「タスク」とも呼ぶこの活動は、新しく学んだ語彙・文法・音声の知識・技能や題材の理解を活用して、「生徒の興味・関心」を生かした「問題解決的」で「体験的」な学習に取り組ませる活動である。それは一定期間の学習の中心的な到達目標になる活動で、「核となるパフォーマンス課題」(core performance task)と呼ばれる性質を持つ。

もう1つのポイントは「活動」に成功させることである。生徒は「核となるパフォーマンス課題」で、複数パラグラフから成るまとまりのある文章を書いたり、よく練習し、デリバリーに注意しながら発話したりすることが求められる。そこで級友との協働学習を組み込む。ワークシートにスモール・ステップの足場がけをして、どの生徒もタスクに成功するように導く。

## 3. 主体的に学ぶ態度の育成：見通し・振り返り

新しいNEW CROWNでも、生徒が主体的に学習できるよう、「見通しを立てる→活動に取り組む→学習を振り返る」というプロセスに沿う構成になっている。まずレッスンの「とびら」の「この課で学ぶこと」で、単元の学習の見通しを立てる。ここで「核となるパフォーマンス課題」を説明し、生徒の学習意欲を高めたい。次のGETで「習得の活動」に、続くUSEで「活用の活動」に取り組む。そして最後の「文法のまとめ」では本課で学びを振り返る。

主体的に学ぶ態度の育成には、1授業時間ごとの見通しと振り返りも重要である。GETの左右のページを各1時間で指導する際は、授業の開始時に本時の目標と流れを板書で示して、生徒が主体的に取り組むように導き、授業終了時に振り返りカードに自己評価を記入させるなどして、自分の学習に責任を持つ態度を育成する。

学期や年間という長いスパンの英語学習について見通し・振り返りをさせるには、教科書の巻末の「What Can I Do?」を活用する。例えば1年生には「学校生活について、短く簡単な記事を書くことができる」とある。到達目標を事前に確認して見通しを持ったり、年度末に振り返ってチェックしたりすることで、生徒は自信を深め、主体的な学習態度を身につける。

これまで同様に、コミュニケーション・アプローチを踏まえた教科書で、その構成に沿って指導すれば、「アクティブ・ラーニング」は自ずと実現されると言える。